

寛文四年辰十二月十四日

〔松屋筆記 六十六〕寒族。

親族の少き者を寒族といふ、通鑑綱目四十三の卷九百六十唐玄宗天寶六載の條に、寒族則孤立無黨とあり、

〔幽遠隨筆下〕我子、人の子をたゞさんとするには、父が血と子の血とを合すに、我子なれば親の血ひとつに合ひ、こと人の子なれば血ひとつにならずと、世にいひ傳へ、芝居などによく用ること也、是古きためしにこそ、前にいふ兼盛の合血すべきといへる、即是なり、

〔袋草紙四〕江記云、赤染ハ赤染時用女也、依歷右衛門志尉等號、赤染衛門、實ハ兼盛女也、離別彼母之後稱有女子、欲尋取之處、母惜而稱不然之由、相論之間、爲適檢非違使時用沙汰之間、而彼母密通相住之間、彌稱非兼盛子之由、深稱時用子云々、兼盛可令對面三〇對面二字、中古歌仙之由申云云、

乳母名稱

〔倭名類聚抄二〕男女ヲ乳母ノ日本紀師說於言妻妹也、事見彼書、唐式云、皇子乳母皇孫乳母乳母、和名米乃止、辨色立成云、嬬母ヲ和名知ヲ今按即乳母也、乃禮反、字亦作姪、

〔箋注倭名類聚抄一〕女ヲ龍龜手鑑、嬬母、見宋書何承天傳、北史崔季舒傳、及史記倉公傳索隱、伊勢廣本無知字、按神代紀乳母訓于於毛、萬葉集謂之於母、曾禰好忠、長歌謂之於毛、刀自、則有知字、無知字兩通、然類聚名義抄訓于於毛、彼所見廣本亦有知字、疑伊勢廣本傳寫偶脫也、今俗呼字、婆、本居氏曰、於毛、總謂養育小兒之婦人、而乳母爲育兒者之主、故乳母專於毛之名、然親母乳養兒者、亦曰於毛、仁賢紀於母亦兄、此云於慕尼慕是、萬葉集信濃國埴科郡神人部子忍男歌謂父母爲意毛、知知、神武紀、孔舍衛之戰、有人隱於大樹、而得免難、仍指其樹曰、恩如母、時人因號其地曰、母木